



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	山我哲雄・佐藤研著「旧約新約聖書時代史」(教文館, 1992年)
Author(s)	菊地, 純子
Citation	基督教学, 28, 38-43
Issue Date	1993-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46528
Type	other
File Information	28_38-43.pdf



山我哲雄・佐藤研著『旧約新約聖書時代史』

(教文館、一九九二年)

菊地純子

「旧約新約聖書時代史」(以下「時代史」)は年表を伴った一著作であるが、著者が序言に述べるように「旧約新約聖書大事典」(以下「大事典」)との関わりを抜きにして論じる事は出来ない。「時代史」は「大事典」の巻末の年表が「事件や出来事の羅列以上に出ない」(一頁)ので、「より有機的、多面的な歴史理解」(同上)のために著作された。「大事典」の底本となった BETH⁽¹⁾には、年表も時代史も付いていないので、三冊によるこうした試みは日本の当企画のオリジナルな点の一つである。この点を理解しつつ、書評の課題である「時代史」に焦点をあてて少しく議論させていただく。

編集委からいただいた課題は本学会員の山我氏の担当された旧約時代史に限られているが、その時代的広がりには紀元前一万年紀から前三十年にまで及ぶ長い時代である。これは従来旧約聖書時代史として扱われた長さをはるかに越えている。一つは「中間時代」と呼ばれて新旧約の時代からはずされていた期間の長かった前二世紀から前一世紀の時代は、歴史的に見れば実は「沈黙の時代」ではなく、ユダヤ教にとってはヘレニズム思想との関わりで重要な時代であり、ひいては新約聖書の理解にとって重要である。従って当然のことながら「時代史」でこの時代を引き続けて扱うことで歴史の流れを自然に追うことができる。又、叙述の始まりも文献資料が語る「歴史時代」をはるかに逆上⁽²⁾って、通常旧約時代史には入らない場合の多い時代である。古代オリエント学は旧約聖書学から出⁽³⁾発したものの今では独自の学科となっているが、そこではこの時代については文献学者ではなく主に考古学者が扱っている。一般書としては HENNESSY⁽³⁾ に軽便な著作がある。どこから時代を始めてどこで区切るかという時代設定の問題は著者の歴史観を反映していると言ってよ

い。「時代史」では「周辺世界を含めて見取図的な全体像を踏まえておくことは不可欠である」(二頁)という一文がそれを語っている。言い換えれば人類の歴史を現在の研究がたどり得た一番の始めから考えることが重要であった。それではそうした著者の意図は叙述の中で充分生かされているか。狩猟採集、農耕牧畜経済と太字の歴史用語が挙げられていくが、それらの内的関連はどうであるか。人間と自然界との関係が決定的に変化した「新石器革命」以前の狩猟採集の時代を想定することが古代オリエント社会の理解の第一歩となる点に異論はあるまい。この時代は「大事典」では「狩り」の項目となるか、索引を通じて「エサウ」の項目になるか、この場合は農耕生活と共存する狩猟が問題であり、農耕生活以前の時代を説明する歴史学の成果は「年表」とその説明としての「時代史」によってはじめて紹介される。その場合、エジプト、パレスチナ、メソポタミアと区分して書かれた年表をそのまま受けて説明されたのは事柄に則しているだろうか。地域を特定するのであれば、先石器新石器時代以降にトルコの頃がないのはいかにも残念である。考古学の成果

はチャヨニユやチャタル・フユクをエリコの同時代の遺跡として重要視させる。そもそも農耕時代以前の遺跡はさまざまな地方の高地のほら穴に発見され、変化に豊む自然の食料庫に近い場所であったと理解される。初期の農耕文化もなお、著者が六頁五、六行目に書かれているように「湾岸に近いいわゆるメソポタミア地方」以外、すなわち肥沃の三日月地帯をとり囲む山麓で認められている。そして定住地の遺跡が銅器時代に入って次第に二つの川の沖積平野の南部に移って行くという事態を説明するのに以前から二つの考え方があつた。ひとつは著者のとられている考え方で雨量の地域差に起因するものである。もうひとつは気候の変化に注目する考えである。今から三十年前に行われたペルシャ湾岸の地層のボーリング調査により、紀元前三千五百年頃までは海水が現在の三メートルは高かったとの結果が出されて以来、それ以前のメソポタミア低地は農耕不能な沼沢地であつたと考える。この考え方によれば、大洪水と呼ばれるものが実は文明の地のこうした過去の記憶を反映した可能性も否定できない。

さて、すべての時代・地域について検討するのは本稿のスペースからしても評者の力からしても不可能である。そこで聖書時代史を叙述するという課題と方法についての議論と評者の気付いた点を後半で述べさせていたいただきを果したい。

先史学や古代オリエント学の扱う時代を扱うにしても著者は「聖書の使信を理解するためにその歴史的背景について学ばねばならない」(一頁)との問題意識を表明しておられる。本文の中では限られた頁数の中で(1)聖書の直接舞台になった地方に関する資料を紹介され、(2)聖書記述と比較しうる資料を特記されている。思いつくままに拾えば「サルゴン王の捨て子伝説」(一五頁)「天地創造叙事詩」(一七頁)、ジグラット(二〇頁)等は、(2)に述べた資料であり、「シエシヨシク王の勝利の碑」(四七頁)「シャルマナセルⅢの黒色オベリスク」(五八頁)、「メシヤ碑文」(六四頁)、「バビロニア年代記」(七〇頁)等は、(1)の資料である。(1)はいわば当時のパレスチナとその他の地方との直接交渉史を証拠だてる「物証」であり、(2)は「状況証拠」である。著者の意図としては(2)については特

にこれ以上に枚挙にいとまがないほどの太字の頃を書かれていただろう。例えば『生活に疲れた者の魂との対話』(二七頁)はヨブ記を含む対話文学への関心から、『ウルナム法典』は聖書の法との比較という見地から。しかしその多くは「大事典」の索引により著者の意図をたどることができるが、そうでないものもある。例えば『ウルの滅亡の哀歌』(二〇頁)はそうした道すじがなく読者の探求が絶たれてしまう。太字により興味を起された資料に邦訳があるのだから、もし読者がそれを読む機会を与えられれば、古代オリエントでは町が滅びる事が何であったのかという例を知ることができる。これは一例を挙げたまでであるが、資料と対話する事が歴史を知る上で常に忘れてはならない基本的事柄であることを考えるとこの点は再考されて註等を付けられてはどうか。これは一般書には不向きなペダンティックな問題として語っているのではない。「時代史」の読者に、例えば上記の例ではシユメール語を学び資料批判をしつつ読め、という途方もない「すじ論」を言っているのではない。邦訳であっても第一次資料に触れた読者は必ず、旧約聖書の民にとってエルサレ

ムの崩壊とバビロン捕囚がどのような事態を想起させたか考えられるはずである。そして旧約の民が、まぎれもなく古代オリエント世界の住民であつたことと同時に、その中で独自の世界を持った人々であつたことを知らされる。こうした比較の積み重ねが著者の目ざされた「歴史的背景について学ぶ」という事であるまいか。「大事典」の方で欧米の文献も参照していることを考えると、資料の近代語訳があるものは邦訳でなくとも参照されるべきなのかも知れない。

出版されて既に現時点で一年を経て、書評も発表され、⁽⁵⁾著者は既に幾つかの誤植や不備に気付かれているに相違なく、細かな点を指摘するのはためらわれるが、旧約時代史の全体理解に関わる点を以下四点議論してみたい。

①一七頁のⅢ前二千年紀初頭の頃の一般記述のところでメソポタミアが東北西に開かれた地形であるというのはどのようなことか。東は険しいザグロス山脈があり、それ故イランとイラクは当初から地域としては区切られていたと考えられる。南のペルシャ湾は時代により重要性が変わるものの一般的にはむしろ開かれていると言つて

よく、はるか東のインダス文明との交流は、ザグロス山脈の交通困難故にもつぱらペルシャ湾經由の海洋によつたろうと考えられている。ペルシャ湾のバハレーンがニッブル出土の粘土板によればシュメール人にとつて地上の樂園ともいふべき場所であり、それはそこが交易で栄えた地であつた事と無関係ではないだろう。この点については一五頁に間接的に触れられており著者はもとより了解済みであろう。聖書時代の交通手段としてユーフラテス川の重要性は陸路と並んで指摘するまでもないが、歴史の動きを決める決定的な要因を取り違えるような地形理解を読者がされてはと危惧するのは穿ちすぎか。②二一―二二頁「神を超越的なものととらえるセム人の特質」とはイスラエルの神とメソポタミア(ここでは古巴ビロニア王朝)の神の共通性についての叙述であろうか。確かにマルドゥク神が最高神として神々の中に君臨したことは資料から確かに言えるが、それは人間世界をそのまま映したような神々の闘争の中で勝つた神としてであり、旧約聖書のヤハウェに対して用いられる超越神という語がふさわしいかどうか疑問に付したい。③五二頁「ダビ

デのはば千年後に現われた真の第二のダビデ」とは誰か。もちろん「時代史」を手取る読者には言わずもがなであろうが、こうした叙述、特に「真の」という形容は前千百年から九百二十年のバレスチナの歴史叙述にふさわしいだろうか。真の第二のダビデがどのような人のことか、又それが歴史上の人物の誰にあたるのかという間へ歴史学は直接一つの答を出すことはできない。これは又積極的な意味でも出来ない。一七一頁の新約時代史では「メシヤはダビデの末裔としてベツレヘムから出て来なくてはならない、というメシヤイデオロギー」という表現があるし、一八五頁のイエスの復活についても叙述が客観的であるので不統一の観はまぬかれ得ない。④七六頁以降のⅨアッシリアの強盛と滅亡では、七九頁に聖書資料と聖書外資料の両方から事態に光をあてることのできる数少ない事件が詳細に扱われて興味をさそう個所である。セナケリブやエサルハドンの碑文は何度読んでも興味深く、後者は特にサムエル記下から列王紀上一二二章の記事と並んで王即位の正当性をめぐる文書としてひんぱんに取りあげられる重要度の高いものである。せっかく紙

面を割かれての叙述なのでアッシリア側の資料の紹介もほしかったところである。シャルマナセルⅢの黒色オベリスクが紹介されている(五八頁)のであるから過大要求とは思われない。もっとも一般的には物的資料の方がインパクトが強い事も無視はできない。

以上評者は浅学非才を省みず、労作の「時代史」を検討させていただいた。歴史叙述をめぐる基本的問題について「胸をお借りして」議論させていただいたことに感謝の意を表したい。理解の誤り、判断の誤りについて又評していただければ幸いである。著者の問題意識とまとめあげられた力量に魅せられて読ませていただいたが、それにしても聖書を理解しようとして歴史的背景を知るためには、いかに長い時代と多くの地域の歴史に眼を向けなければならぬことか。このような仕事を成しとげられた著者に敬意を表させていただき拙い書評を終らせていただきたいと思う。「大事典」に多少とも関らせていただいて著者の仕事ぶりを存じ上げていたのでなるほどという感もある。今後ともこの「時代史」が「年表」と「大事典」の三点セットとして広く使われて、興味のつきないこ

の分野に一人でも多くの同労者が加わることを信じ又望みたい。

- (1) Biblisch-historisches Handwörterbuch, 1963～1979
Göttingen の註
- (2) 石田友雄他『総説旧約聖書』一九八四 日本基督教団出版局
を参照。
- (3) H. J. Nissen, *Grundzüge einer Geschichte der Frühzeit
des Vorderen Orients*, 1983 Darmstadt.
- (4) 筑摩世界文学大系Ⅰ『古代オリエント集』昭和五十三年筑摩
書房四九一六四頁。
- (5) 書評 月本昭男『聖書と教会』一九九二年八月号四二―四三
頁。